

ケチュア語アヤクーチョ方言の示差的目的語標示と情報構造

諸 隈 夕 子

東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程

【要旨】 本稿では、アヤクーチョ方言の *-sqa* または *-na* によって作られる体言化従属節の中で起きる示差的目的語標示 (differential object marking: DOM) を記述・分析する。アヤクーチョ方言では、体言化従属節内の目的語の標示パターンに *-ta* と *-g* の2通りが見られる。本稿では、聞き取り調査の結果に基づき、*-ta* による標示が、対比的焦点および意外性という情報構造上の概念に動機づけられると主張する。このようなアヤクーチョ方言の DOM は、DOM の類型論および情報構造の理論において次の3点を示唆する。① DOM は多くの言語で報告されてきた有生性、定性・特定性、主題性以外に、対比的焦点や意外性にも動機づけられることがある。② 従来情報構造の標示が見られないとされてきた従属節内でも、対比的焦点や意外性といった情報構造上の概念が標示され得る。③ 情報構造における対比性の有無は、明確に言語形式に反映され得る*。

キーワード: ケチュア語, 示差的目的語標示, 対比的焦点, 意外性, 従属節

1. はじめに

ケチュア語は、ペルー・ボリビア・エクアドルを中心とした南米アンデス地域で使用される先住民言語である。ケチュア語の一変種であるアヤクーチョ方言 (ISO 639-3 [quy]) は、ペルー南部に位置するアヤクーチョ県、ワンカベリカ県、アプリアク県西部で使用されており、話者は約 85 万人 (Campbell et al. 2017) である。

このアヤクーチョ方言では、体言化従属節内でのみ、示差的目的語標示 (differential object marking, 以下 DOM) すなわち、目的語の標示にバリエーションが見られる現象が見られる。例を (1) に示す。

* 本稿の内容は、執筆者が2018年度に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文の内容を発展させたものである。本稿の執筆にあたっては、以下の研究者から貴重な意見および情報をいただいた：梅谷博之、風間伸次郎、佐々木充文、柴谷方良、島健太、鈴木唯、谷川みずき、中本舜、長屋尚典、山本恭裕、吉田樹生 (敬称略)。本稿はまた、2名の匿名の査読者よりいただいた多くの助言により、構成・内容・表現が改善された。ここに記して感謝申し上げる。並びに、調査に協力頂いたアヤクーチョ方言話者の方々に心から謝意を表す。無論、本稿の誤りは全て著者の責任である。なお、本研究は JSPS 科研費 JP21J13736 (代表：諸隈夕子)、JP19H01264 (代表：松本曜)、および2019年度布施学術基金学術奨励費 (若手研究者研究費) の助成を受けたものである。また、本研究は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(代表者：窪蘭晴夫) の研究成果の一部である。

- (1) Mana Raul qillqa- \emptyset /-ta qu-sqa-n-rayku
 NEG PN[NOM] letter-ACC1/-ACC2 give-NMLZ.REAL-3sg-because
 pay piña-ku-chka-n
 3SG[NOM] be.angry-REFL-PROG-3SG
 Acc1 (\emptyset) 解釈:「ラウルが手紙を送らなかったので彼(女)は怒っている」
 Acc2 (ta) 解釈:「ラウルが送らなかったのは手紙なので彼(女)は怒っている」

(1) では、体言化従属節 *Mana Raul qillqa(-ta) qu-sqa-n* 「ラウルが手紙を送らなかった(こと)」内の直接目的語 *qillqa* に $-\emptyset$ (Acc1) と *-ta* (Acc2) の2つの異なる標示が許容される。この2つの格標示は対比的焦点(5.1節)の有無で異なる。具体的には、目的語が $-\emptyset$ (Acc1) で標示された場合に特別な解釈はないが、*-ta* (Acc2) で標示された場合には対比的焦点であることが示される。対比的焦点とは、ある発話によって話し手と聞き手の共通知識に加わり、かつ共通知識にある別の事物と対照されている情報要素を指す。(1)の例では、「ラウルが何かを送らなかった」という前提を踏まえ、ラウルが送らなかった何かは *qillqa* 「手紙」であるという情報がこの発話によって共通基盤に加わっている。さらにこの手紙は、ラウルが送らなかった可能性のあるいくつかの物に対して、実際に送られなかったという点で対照されている。目的語にこのような解釈がある場合、目的語は $-\emptyset$ ではなく *-ta* で標示される。ケチュア語は南アメリカの言語のなかで比較的研究の蓄積のある言語であるものの、アヤクーチョ方言のこのようなDOMに関する記述は管見の限り存在せず、この言語において詳細な記述の待たれる現象である。

アヤクーチョ方言のDOM現象は記述言語学的観点だけでなく、通言語的なDOMの研究の点からも興味深い。第一に、この言語のDOMは、これまでDOMを引き起こす要因として通言語的に広く報告されている有生性や定性・特定性といった特性(Comrie 1989; Aissen 2003; Dalrymple and Nikolaeva 2011)では説明ができない。まずアヤクーチョ方言において、 $-\emptyset$ と *-ta* のどちらで標示されるかは有生性の有無を反映しない。(1)において目的語は全く同じ *qillqa* 「手紙」であり、有生性の差は見られない。同様に、(1)に見られるDOMは目的語が有生物である場合も同様に見られるため(3.1(17)を参照)、このDOMを有生性によって説明することはできない。さらに、アヤクーチョ方言のDOMは特定性や定性の観点からも説明できない。(1)で見られる2種類の目的語標示はいずれも、目的語となる手紙が文脈上特定されているか否かによらず文法的に適格である。

第二に、このDOMが体言化従属節の中でのみ起き、それ以外の節内では観察されない点もまた言語類型論的に珍しい。例えばこの言語の主節では、直接目的語は(2)のように一貫して *-ta* で標示され、 $-\emptyset$ による標示は許容されない。

- (2) Chay runa pay* \emptyset /-ta maqa-ru-n.
 that man[NOM] 3SG*-ACC1/-ACC2 beat-PST-3SG
 「あの男が彼(女)を殴った」

主語の特性によって主語の標示が変化する示差的主語標示 (differential subject marking, 以下 DSM) が従属節内のみで起きる例は、日本語 (大島 2010; 岸本 2016) やトルコ語 (Kornfilt 2009) など様々な言語で観察されている。しかし、DOM が従属節内のみで見られる例はケチュア諸語 (Lefebvre and Muysken 1988; Cole and Hermon 2011) を除きほとんど報告されていない。このように、アヤクーチョ方言の DOM は、DOM を引き起こす要因となる目的語の意味的特性と、DOM と節の種類との相互作用という 2 つの理論的観点からも注目すべき現象である。

このような理論的背景から、本稿ではアヤクーチョ方言の DOM を、聞き取り調査で得られたデータを元に、情報構造に着目して記述する。まず、この言語の DOM には有標な主語標示や語順による統語的な制限があり、このような統語的条件が無い場合に情報構造に基づいた標示の選好が見られることを論じる。そして、*-ta* で標示される目的語は対比的焦点か意外性、またはその両方を持つと主張する。本稿における対比性とは、ある指示対象が、話し手と聞き手の共有知識にある特定の集合から、その集合に属する少なくとも一部の事物には当てはまらない条件で選ばれていることを指す (Neeleman et al. 2009)。意外性とは、文中のある要素が、共通基盤を鑑みて、聞き手にとって予想外であると話し手に評価されること (Zimmermann 2008) を指す (5.2 節参照)。本稿が提案するこの分析は、DOM の分析において、対比的焦点と意外性という DOM における新たな分析の視点を提示するだけでなく、従来「語用論的に平坦 (“pragmatically flat”)」(Bybee 2002: 5) とされ、内部で情報構造の標示がなされない (Komagata 2003) と分析されてきた従属節内で、情報構造上の概念を言語形式として反映する現象が起き得ることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では、アヤクーチョ方言の DOM を分析する前提となる基礎的な知識を導入する。第 3 節では、アヤクーチョ方言の体言化従属節における DOM の振る舞いを節の種類と文法関係の観点から記述する。第 4 節でこの DOM の分布に関する体言化従属節内の統語的条件を提示したうえで、第 5 節では機能的観点から分析し、これが対比的焦点および意外性によって分析できることを示す。第 6 節では以上の分析を踏まえ、アヤクーチョ方言の DOM の類型論的特徴を論じる。第 7 節は結語である。

2. 背景

この節では、アヤクーチョ方言の DOM を分析する前提となる事実を導入する。2.1 はアヤクーチョ方言の文法の概観を、DOM 現象において重要な特徴に着目して提示する。2.2 ではこれまでの DOM 研究を概説し、理論的課題を提示する。2.3 は本稿で使用するデータについての説明である。

2.1. アヤクーチョ方言の概観

第 1 節の例文 (1) と (2) で紹介した通り、アヤクーチョ方言の DOM は体言

化従属節において目的語の標示に *-ø* と *-ta* の 2 通りが見られるという現象であり、この現象は従属節内ではしか見られない。そこで以下の小節では、アヤクーチョ方言の形態統語法のうち、アヤクーチョ方言の DOM の分析において重要な、格体系 (2.1.1) と従属節 (2.1.2) を概観する。

2.1.1. アヤクーチョ方言の格体系

アヤクーチョ方言は膠着的な形態統語法を取る言語である。人称・数や格、テンス・アスペクト・ヴォイスなどを接尾辞で標示する。(3) に例を示す。

- (3) Uku=lla-manta=s wiskaku=qa kuti-chi-mu-n.
 inside=only-ABL=FOC.HS viscacha[NOM]=TOP return-CAUS-VEN¹-3SG
 「ビスカッチャは自分のねぐらから返答してきた」

(Hinostroza Ayala 2000: 60)

(3) では、接尾辞として奪格 *-manta*、声かけの直示的な方向を示す *-mu*、主語の人称を示す *-n*、使役を示す *-chi* が用いられている。さらに接語として、限定のとりたて「だけ、のみ」²を示す *=lla*、焦点と伝聞の証拠性を示す *=s*、主題を示す *=qa* が用いられている。このように、アヤクーチョ方言は豊富な接尾辞や接語を用いて様々な文法的カテゴリーを標示する。

アヤクーチョ方言のアラインメントは対格型であり、語順は SOV を基本とする。

(4) は自動詞文、(5) は他動詞文の例である。

- (4) Huk runa brinca-chka-n.
 a man[NOM] run-PROG-3SG
 「男の人が走っている」
- (5) Huk runa pelota-ta hayta-chka-n wasi uku-man.
 a man[NOM] ball-acc2 kick-PROG-3SG house inside-DAT
 「男の人がボールを家の中へ蹴っている」

(4) では自動詞文主語である *huk runa* 「男の人」が明示的な格標示を伴わず現れている。(5) では他動詞文主語である *huk runa* 「男の人」が明示的な格標示を伴わない一方で、*hayta* 「蹴る」の目的語である *pelota* 「ボール」は *-ta* で標示されている。このようにアヤクーチョ方言は、自動詞文主語と他動詞文主語は無標で標示され、他動詞文目的語が有標である対格型アラインメントを取る。

¹ 移動や動作の方向が話者に向かっていることを指す。

² とりたて「だけ、のみ」を意味する (Parker 1969: 60; Zariquiey & Córdova 2008: 184) とされるが、(3) では語調を整える機能 (Parker 1969: 60) を表現している。

2.1.2. アヤクーチョ方言の従属節

第1節で述べたように、アヤクーチョ方言のDOMは、体言化従属節の中でのみ見られる。体言化従属節は他の従属節とは異なる形態統語的特徴を持つグループを成している。そこで以下では、アヤクーチョ方言の体言化従属節以外も含む従属節の体系を、形態統語的特徴に着目しながら概観する。

表1はアヤクーチョ方言に見られる従属節について、体言化か交替指示かのタイプ、その従属節を作る従属節化接尾辞、主な機能、主語の明示の可否の4点を整理したものである。

表1 アヤクーチョ方言における従属節の分類

	タイプ	従属節化接尾辞	機能	主語
(i)	体言化	-sqa	動作主以外の関係節化 (既実現)・補文 (既実現)	あり
		-na	動作主以外の関係節化 (未実現)・補文 (未実現)	
(ii)	体言化	-q	動作主の関係節化・行為の目的を表す副詞節	なし
		-y	テンスを持たない補文	
(iii)	交替指示	-spa	主節と同一主語を持つ副詞節	あり
		-pti	主節と主語が異なる副詞節	
		-stin	主節と同一主語を持つ副詞節	

表1のように、アヤクーチョ方言の従属節は統語的な特徴から3つのグループに分類することができる。具体的には、(i) -sqa と -na によって作られる体言化従属節、(ii) -q と -y によって作られる体言化従属節、(iii) -spa, -pti, -stin によって作られる交替指示の機能を持つ副詞節の3グループに分けられる。これらの3つのグループは体言化と交替指示という点だけでなく、節内に主語を含むか含まないかという点で区別できる。第3.2節で詳細に議論するように、この中でDOMが見られるのは (i) (ii) の体言化従属節のみである。

まず、-sqa と -na によって作られる体言化従属節は、(6) のような関係節や (7) のような動詞の目的語に相当する補文として機能する。

- (6) Pay ri-na-n llaqta
 3SG[NOM] go-NMLZ.IRR-3SG village
 「彼(女)が行く村」
- (7) Pay hamu-sqa-n-ta uyari-ru-ni.
 3SG[NOM] come-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 hear-PST-1sg
 「私は彼(女)が来たと聞いた」

(6) の *pay ri-na-n* 「彼(女)が行く」は、名詞 *llaqta* 「村」を修飾する関係節として機能している。(7) の *pay hamu-sqa-n* 「彼(女)が来た」は *-ta* を伴い、主動詞 *uyari-ru-ni* 「私は聞いた」の目的語である補文として機能している。なお、アヤクーチョ方言の体言化節は、(7) のような動詞の目的語としてだけでなく、格接尾辞を

伴って付加詞として使われる場合もあることに注意したい。例えば (1) は、*-sga* によって形成された体言化節が、理由を表す格接尾辞 *-rayku* を伴い、付加詞として機能している例である。

次に、*-q* と *-y* はともに体言化接辞であるが、英語の *to* 不定詞のように主語を含むことができない。この点で *-sga* と *-na* と異なる。*-q* による体言化従属節は、動作主の関係節化や、行為の目的を表す目的節に使われる。(8) は *-q* による関係節の例であり、(9) は *-q* による行為の目的を表す副詞節の例である。

- (8) Tanta-ta miku-q runa
bread-ACC2 eat-NMLZ.AG³ man
「パンを食べる人」

- (9) Miku-q-mi hatari-chka-ni.
eat-NMLZ.AG-FOC wake.up-PROG-1SG
「私は食べるために起床している」

(Parker 1969: 57)

(8) では *tanta-ta miku-q*「パンを食べる」が名詞句 *runa*「人」を修飾している。さらに、(9) では、主動詞 *hatari*「起きる、起床する」で表される行為の目的が *-q* による副詞節 *miku-q*「食べるために」で表されている。

-y によって作られる体言化従属節は、意志動詞の目的語などの補文として機能する。(10) は *-y* による補文の例である。

- (10) Atuq-ta hapi-y-ta muna-ni.
fox-ACC2 hunt-NMLZ.INF-ACC2 want-1SG
「私はキツネを狩りたい」

(10) では *atuq-ta hapi-y*「キツネを狩る」が動詞 *muna*「好む、～したい」の目的語として働いている。

最後に、接尾辞 *-spa*, *-pti*, *-stin* によって作られる従属節は、交替指示 (switch-reference) の機能を持つ副詞節である。具体的には、*-spa* と *-stin* は主節の主語と副詞節の主語が同じであることを表し、*-pti* は主節と副詞節で主語が転換することを表す。(11) は *-spa* を用いた例である。

- (11) Bicicleta-n-man asu-yku-n wak runa salta-kacha-spa-n.
bicycle-3SG-DAT approach-(in)to-3SG that man jump-ITER-SR.SS-3SG
「その男の人が跳ね続けながら自転車に近づく」

(11) では、副詞節 *salta-kacha-spa-n*「跳ね続けながら」が動詞句 *asu-yku-n*「近づく」を修飾している。

第3.1節で詳説する通り、アヤクーチョ方言における主語と目的語の格標示パター

³ 動詞で示される事象の行為者であることを示す。

ンは、節の種類によって異なる。まず、(4) (5) で見たように、主節内で主語は無標の主格、目的語は対格 *-ta* で標示される。

次に、*-sqa* または *-na* による体言化従属節の中では、主語は明示的な形態の無い主格または属格 *-pa* で標示される。属格 *-pa* は *ñuqa-pa misi-y* (I-GEN cat-1SG)「私の猫」における *ñuqa-pa* のように接続した名詞句が他の名詞句の指示物の所有者であることを標示するためにも使われる。*-q* と *-y* による体言化従属節は、節中で主語を明示することができないため、このような主語の標示の交替は見られない。*-sqa*, *-na*, *-y*, *-q* のいずれの場合も、体言化従属節内の目的語は、*-ø* または *-ta* によって標示される (第 3.1 節)。

最後に、交替指示副詞節中の主語と目的語は、主節と同じ形で表示される。交替指示副詞節の中では、主節と同じく主語は一貫して標示なし、目的語は一貫して *-ta* で標示される。

2.2. DOM を引き起こす要因の研究

示差的目的語標示 (DOM) とは目的語の特性に応じて目的語の標示に交替が見られる現象であり、DOM を引き起こす目的語の特性としては有生性や特定性がよく知られている (Bossong 1983; Comrie 1989; Aissen 2003; Dalrymple and Nikolaeva 2011 など)。例えばスペイン語では、(12) のような DOM が起きることが知られている。

- (12) a. El director busca el carro.
DEF manager search DEF car
「責任者はその特定の車を探している」
- b. El director busca un empleado.
DEF manager search INDF clerk(nonspecific)
「責任者は (不特定の) 従業員を探している」
- c. El director busca al empleado.
DEF manager search ACC+DEF clerk
「責任者はその特定の従業員を探している」
- d. El director busca a un empleado.
DEF manager search ACC INDF clerk(specific)
「責任者はある従業員を探している」

(12) の例では目的語の有生性及び特定性に応じて目的語標示が交替している。目的語が非生物である (12) a や不特定の生物である (12) b では、目的語の *el carro*「その車」や *un empleado*「(不特定の)従業員」は特別な標示を伴わずに現れている。一方、目的語が生物かつ特定されている (12) c や (12) d では目的語の *el empleado*「その従業員」や *un empleado*「ある (特定の) 従業員」は前置詞 *a* によって標示されている。このように、有生性や特定性のような目的語の特性を参照して目的語標示に形

態的变化が現れる現象を DOM と呼ぶ。

DOM は (12) で見たスペイン語だけでなく、トルコ語 (Böhm 2015)、パラオ語 (Levin 2019) など系統的に多様な 250 以上の言語で観察される現象 (Bossong 1983: 8) であり、言語類型論において注目を集めてきた (Bossong 1983; Comrie 1989; Aissen 2003; Kittilä 2011)。各言語においてどのような特性が DOM の要因となるかは、言語記述の観点でも類型論の観点でも重要な問題である。

DOM の要因となる目的語の特性には、スペイン語のような有生性と定性・特定性 (Comrie 1989; Aissen 2003; Dalrymple and Nikolaeva 2011) が通言語的に広く認められる一方、主題性 (Iemmolo 2010; Dalrymple and Nikolaeva 2011) による DOM も指摘されている。例えば Iemmolo (2010) は、ロマンス系の言語の DOM を目的語の主題性の観点から分析している。(13) は北部イタリア語の例である。

- (13) *(A) me, non (mi) convince questo.
 ACC me NEG CLIT.1SG convince:PRS.1SG this
 「私には、そのことは合点がいかなかった」 (Iemmolo 2010: 249)

(13) では *me* 「私に」が否定の作用域の外に前置されており、主題として作用している。この場合、目的語 *me* は原則として前置詞 *a* で標示される (Iemmolo 2010: 248–249)。このように DOM は、有生性、特定性、主題性といった様々な要因で起こる現象である。

2.3. データについて

本稿では、エリシテーションおよびその追調査によって得られたデータと、アヤクーチョ方言で書かれたテキストから得られたデータを分析の対象とする。エリシテーションの主要なコンサルタントは日本在住の 40 代女性で、12 歳まではアヤクーチョ方言のモノリンガルとして育ち、その後の学校教育によってスペイン語を習得したバイリンガルである。データの代表性を検討するため、このエリシテーションで得られたデータを元にアヤクーチョ市在住の話者複数人に追調査を行った。その結果、判断が一致したため、本稿で示す文法性判断のデータはこの言語の話者の文法性判断をよく代表するものであると言える。さらに、これらの聞き取り調査で得られたデータに加え、アヤクーチョ方言の民話の書き起こしテキスト (Parker 1963) から収集した用例も取り上げる。

エリシテーションにおいては作例を用い、容認性判断を依頼した。ミニマルペアとなる文の中で *-ta* と *-ø* のいずれの目的語標示も文法的には容認される場合、ある文脈ではどちらの方がより適切かを判断して頂いた。この判断に基づいて、以下では、ある例の 2 つの目的語標示パターンのうち、片方のパターンがもう 1 つのパターンよりもある特定の文脈を明確に表現すると話者が判断したことを「好まれる」と表現している。例文を提示する際は、好まれない標示パターンを「?」で標示している。

3. アヤクーチョ方言の DOM の統語的特徴

本節ではアヤクーチョ方言の DOM の統語的特徴を記述する。従属節における DOM は、その理論的・言語類型論的重要性にもかかわらずケチュア語全体でもあまり記述が進んでいない現象であるため、基礎的な記述から行う必要がある。具体的には、第 3.1 節で DOM が生じるのが体言化従属節に限られることを示したうえで、第 3.2 節では示差的標示を許す文法機能が直接目的語に限られることを明らかにする。これらの記述を通して、アヤクーチョ方言の DOM が体言化従属節において興味深い言語類型論的特徴を持つことを観察する。

3.1. DOM は体言化従属節のみで起きる

アヤクーチョ方言の DOM は、体言化従属節の中でのみ見られる。2.1.2 で見たように、アヤクーチョ方言の従属節は、形態統語的特徴から (i) *-sqa* と *-na* による主語を含む体言化、(ii) *-q* と *-y* による主語を含まない体言化、(iii) *-spa*, *-stin*, *-pti* による交代指示の 3 つのグループに分類できるが、これらのうち体言化従属節である (i) と (ii) でのみ *-ø* と *-ta* の 2 通りの目的語標示が見られる。*-sqa* による従属節内の DOM は既に (1) で観察した。(14) は *-q* で作られる関係節、(15) は *-y* で作られる補文の中で見られる DOM の例である。

(14) Tanta-*ø*/-ta miku-q runa
bread-ACC1/-ACC2 eat-NMLZ.AG man
「パンを食べる人」

(15) Atuq-*ø*/ta hapi-y-ta muna-ni.
fox-ACC1/-ACC2 hunt-INF-ACC2 want-1SG
「私はキツネを狩りたい」

一方で、体言化従属節内以外、つまり主節や交替指示副詞節では DOM は見られない。(2) で見たように、主節内では目的語は常に *-ta* で標示され、*-ø* で標示されることは無い。さらに従属節であっても、体言化従属節でない交替指示副詞節の中で DOM は見られない。例えば、(16) のような同一主語の交替指示を示す *-spa* による従属節の中では、目的語は必ず *-ta* で標示される。

(16) Pay mochila**-ø*/-ta hapi-spa lluqsi-ru-n.
3SG[NOM] knapsack-ACC1/-ACC2 grab-SR.SS go.out-PST-3SG
「彼(女)はリュックサックをつかんで出て行った」

アヤクーチョ方言の DOM は、体言化従属節がどのような文法的機能を果たす場合でも見られる。(1) では *-sqa* や *-na* によって作られる副詞節の中で起きる DOM の例を見たが、これらで作られる関係節や補文の中でも DOM が見られる。(17) は例である。

- (17) Juan qillqa-ø/-ta qu-sqa-n runa-ta=m
 PN[NOM] letter-ACC1/-ACC2 give-NMLZ.REAL-3SG man-ACC2=FOC
 Pedro maska-chka-n.
 PN[NOM] search-PROG-3SG
 「フアンが手紙を送った人をペドロが探している」

(17) では、名詞化節 *Juan qillqa-ø/ta qu-sqa-n* 「フアンが手紙を送った」が *runa* 「人」を修飾する関係節として機能している。この関係節内の目的語 *qillqa* は、(1) のような副詞節内と同じく *-ø* と *-ta* の2通りで標示され得る。このように、体言化従属節内の DOM は、その従属節が関係節か補文かによらず観察できる。

このように、アヤクーチョ方言の DOM は *-sqa*, *-na*, *-q*, *-y* の4つの接尾辞の体言化従属節内でのみ生じる。以下ではこの4つの体言化のうち、*-sqa*, *-na* による体言化の記述に専念する。(14) (15) のような *-q* または *-y* で作られる体言化従属節内の DOM もまた重要な課題であるが、紙幅の都合により、体言化の中でも特に幅広い機能を持つ *-sqa* と *-na* による体言化従属節内の DOM に集中して議論する。

3.2. 示差的標示は直接目的語にのみ見られる

本稿で扱う示差的標示が見られるのは、体言化従属節内で直接目的語として機能する名詞句のみである。既に直接目的語が標示のバリエーションを見せる例は、(1) などで観察した。一方、直接目的語ではない名詞句にこのような現象は見られない。例えば、(18) (19) のように間接目的語 (18) や付加詞 (19) には標示のバリエーションが見られない。

- (18) Mana Raul qillqa-ø/-ta pay-man/*-ø
 NEG PN[NOM] letter-ACC1/-ACC2 3SG-DAT/-ACC1
 qu-sqa-n-rayku pay piña-ku-chka-n.
 give-NMLZ.REAL-3SG-because 3SG[NOM] be.angry-REFL-PROG-3SG
 「ラウルが彼(女)に手紙を送らなかったことのために彼(女)は怒っている」
- (19) Mana Raul qillqa-ø/-ta libro-wan/*-ø
 NEG PN[NOM] letter-ACC1/-ACC2 book-COM/-ACC1
 qu-sqa-n-rayku pay piña-ku-chka-n.
 give-NMLZ.REAL-3SG-because 3SG[NOM] be.angry-REFL-PROG-3SG
 「ラウルが本と一緒に手紙を送らなかったことのために彼(女)は怒っている」

(18) の *pay* 「彼(女)」は主節内では与格 *-man* で標示される間接目的語、(19) の *libro* 「本」は主節内では共格 *-wan* で標示される付加詞である。このように、主節内で対格 *-ta* によって標示されない間接目的語や付加詞に標示のバリエーションは見られない。

対格 *-ta* で標示される名詞句が、直接目的語ではなく付加詞として機能する場合もあることにも注意したい。例えば、移動における着点は (20) のように *-ta* で標示されるが、直接目的語ではなく付加詞である。

- (20) Pay chay llaqta-ta/*-ø ri-sqa-n-ta riku-ru-ni.
 3SG[NOM] that village-ACC2/-ACC1 go-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 see-PST-1SG
 「彼（女）がその村に行くのを見た」

(20) のように、*-ta* で標示される着点名詞句などの付加詞が *-ø* で標示されることは無い。

(20) における *llaqta* 「村」が他動詞文の直接目的語ではなく自動詞文の付加詞であることは、逆使役化や受動文化が不可能であることからわかる。アヤクーチョ方言の他動詞文は、再帰接尾辞 *-ku* によって派生される逆使役文または受動文を持つ。(21) (22) は例である。

- (21) Ñuqa wawa-y-ta paka-ru-ni.
 1SG[NOM] child-1SG-ACC2 hide-PST-1SG
 「私は自分の子供を隠した」

- (22) Wawa-y paka-ku-ru-n.
 child-1SG[NOM] hide-REFL-PST-1SG
 「私の子供は隠れた」

(22) では (21) における動詞 *paka* 「隠す」が *-ku* によって逆使役化している。(21) において *-ta* で標示される直接目的語 *wawa-y* 「私の子供」は、(22) では主語として現れている。

一方で、このような逆使役化は、(20) に対応する主文では不可能である。

- (23) *Chay llaqta ri-ku-ru-n.
 that village[NOM] go-REFL-PST-3SG
 (「その村は行かれた」を意図)

(20) において *llaqta* 「村」は *-ta* で標示されているが、(23) のように主動詞 *ri* 「行く」を逆使役化して *llaqta* 「村」を主語とすることはできない。このような *-ta* で標示される着点の名詞句は付加詞であり、標示のバリエーションを見せない。

4. アヤクーチョ方言の統語的条件による DOM の制限

アヤクーチョ方言の DOM は統語的条件によって制限を受ける。具体的には、同じ体言化従属節内の主語の標示や語順によって DOM が生起することができない場合や、DOM が生起しにくい場合がある。この節では、このようなアヤクーチョ方言の統語的条件による DOM を、同節内での主語標示 (4.1) と節内の語順 (4.2) に着目して記述する。4.3 はこの節のまとめである。

4.1. 主語の格標示による DOM の制限

アヤクーチョ方言の体言化従属節内では DOM だけでなく、主語標示に無標示と属格標示の 2 通りが見られる示差的主語標示 (DSM) も見られる (2.1.2 節)。(24) はアヤクーチョ方言の DSM の例である。

- (24) Chay runa(-pa) pay- \emptyset maqa-sqa-n-ta riku-ru-ni.
 that man(-GEN) 3SG-ACC1 beat-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 see-PST-1SG
 「あの男が彼(女)を殴るのを見た」

(24) における *chay runa* 「あの男」のように、*-sqa*, *-na* による従属節内で主語には主格と属格 *-pa* の 2 通りの標示パターンが見られる。

興味深いことに、アヤクーチョ方言では、同一従属節内の主語がどのような標示を取るかによって、DOM が起きる場合と起きない場合が分かれる。具体的には、同じ体言化従属節内の主語が属格 *-pa* で標示されている場合、目的語は必ず (25) のように *- \emptyset* で標示され、*-ta* で標示されることは無い。

- (25) Chay runa-pa pay- \emptyset /^{*}-ta maqa-sqa-n-ta riku-ru-ni.
 that man-GEN 3SG-ACC1/-ACC2 beat-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 see-PST-1SG
 「あの男が彼(女)を殴るのを見た」

すなわち、アヤクーチョ方言の DOM は、(24) で見た DSM による制約がある。

このように、アヤクーチョ方言の DOM は、体言化従属節内で主語が主格で標示されている場合にのみ見られる現象である。つまり、*-sqa* または *-na* による体言化従属節内における主語と目的語の標示の組み合わせは、「主語：主格、目的語：対格 (*- \emptyset)*」, 「主語：主格、目的語：対格 (*-ta*)」, 「主語：属格、目的語：対格 (*- \emptyset)*」の 3 通りのみが許容される。DSM の詳細な記述は本論文の対象とする範囲を超えるため別稿に譲るが、アヤクーチョ方言において同一節内における DSM と DOM が互いに制約を与えることは重要な事実である⁴。

4.2. 語順による DOM の制限

アヤクーチョ方言では、語順によって DOM が制限される場合がある。具体的には、目的語が主語に先行する場合、目的語は *-ta* で標示されることが好まれる。(26) は例である。

⁴ このアヤクーチョ方言の DOM は、他の言語で見られるグローバル・マーキング (de Swart 2006) と関連した特徴を持つという指摘を査読者にいただいた。グローバル・マーキングとは、目的語が主語に典型的な有性・定などの特性を持つ場合に、主語と混同されることを避けるため、目的語に有標な標示がなされることを指す。アヤクーチョ方言の DOM においては、グローバル・マーキングとの平行性を認めることができる。主語が主格で標示されるとき、目的語を形態的に主語と区別するため *-ta* で標示する場合がある。一方、主語が属格 *-pa* で標示されている場合、既に目的語と主語が形態的に区別されるため、DOM は発生しない。

- (26) a. ?[[Juan-pa maska-sqa-n] warmi- \emptyset Jose
 Juan-GEN search.for-NMLZ.REAL-3SG woman-ACC1 Jose[NOM]
 tari-sqa-n]-ta uyari-ru-ni.
 meet-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 hear-PST-1SG
 「フアンが探していた女性をホセが見つけたと聞いた」
- b. [[Juan-pa maska-sqa-n] warmi-ta Jose
 Juan-GEN search.for-NMLZ.REAL-3SG woman-ACC2 Jose[NOM]
 tari-sqa-n]-ta uyari-ru-ni.
 meet-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 hear-PST-1SG
 「フアンが探していた女性をホセが見つけたと聞いた」

(26)において目的語「フアンが探していた女性」が主語「ホセ」に先行する場合、(26) aのように目的語が $-\emptyset$ で標示されるよりも、(26) bのように目的語が $-ta$ で標示されることが好まれる。これは動詞の前に無標の名詞句が二つ連続した場合、それをSOVと解釈するか、OSVと解釈するかが曖昧になるためと考えられる。OSVの場合にOを $-ta$ で標示することでこの曖昧さを解消することができる。

ただしアヤクーチョ方言では、他のケチュア諸語で見られる、DOMによる厳密な語順の制限は見られない。インバプーラ方言およびクスコ方言では、体言化従属節内の主語標示が $-\emptyset$ かつ目的語標示が $-\emptyset$ の時、語順はSOVに制限される一方、主語標示が $-\emptyset$ かつ目的語標示が $-ta$ の時はSOV語順だけでなくOSV語順も許容される (Cole and Hermon 2011: 1239–1240)。しかしアヤクーチョ方言では、主語標示が $-\emptyset$ かつ目的語標示が $-\emptyset$ の場合でも、SOVとOSVのいずれの語順も許容される。例えば(26)において(26) aは「フアンが探していた女性がホセを見つけたと聞いた」の解釈が一般的だが、文脈上見つける行為の主体がホセ、対象が「フアンが探していた女性」であることが明らかな場合、(26) aも「フアンが探していた女性をホセが見つけたと聞いた」の表現として許容される。

4.3. まとめ

本節では、アヤクーチョ方言のDOMが単に体言化従属節に現れるだけでなく、体言化従属節内の統語的条件によっても制限を受けることを明らかにした。具体的には、同一従属節内の主語が属格で標示されているとき、目的語は $-\emptyset$ でのみ標示されるためDOMは生じないこと、また、従属節がOSV語順をとるとき、目的語は $-ta$ で標示される傾向にありDOMが生じにくいことを指摘した。つまり、アヤクーチョ方言のDOMは主語が主格でSOV語順をとる体言化従属節に典型的に生じる。

以上の観察をふまえて、第5節では、アヤクーチョ方言のDOMが見られる典型的な環境において、2つの目的語標示がどのように使い分けられているかを分析する。具体的には、対比的焦点と意外性という2つの情報構造上の概念を利用して、

有標な標示である *-ta* が使われやすい条件を分析する。

5. アヤクーチョ方言の DOM における *-ta* 標示の情報構造的条件

本節では、アヤクーチョ方言の DOM では、*-ta* による標示が情報構造的に有標な特徴を持つ目的語に好まれることを明らかにする。具体的には、目的語が対比的焦点にあたるか、意外性を持つか、またはその両方である場合に目的語が *-ta* で標示される。それ以外の場合には \emptyset で標示される。

表 2 は *-ta* による標示が好まれる目的語の情報構造上の概念と、それに対応する具体的な文脈をあらかじめ整理したものである。

表 2 *-ta* による標示が好まれる目的語の情報構造上の概念と具体的な文脈

目的語が持つ情報構造上の概念	具体的な文脈
対比的焦点	否定の作用域：5.1.1 (27)
	選択肢限定の質問への答え：5.1.1 (28)
	訂正の対象：5.1.1 (29)
意外性	予想外の指示対象：5.2 (33)

表 2 で示すように、目的語が対比的焦点にあたるのは、具体的には否定の作用域、選択肢が限定されている質問への答え、訂正の対象のいずれかにあたる場合である。目的語が意外性を持つのは、目的語となる指示対象が、話し手と聞き手の共通知識に基づき、その発話が示す命題を成り立たせにくいと評価される場合である。目的語が対比的焦点にもあたらず、意外性も持たない場合、 \emptyset で標示される。

以下では、アヤクーチョ方言の DOM において *-ta* による標示が好まれる場合を、具体的な事例を挙げて記述する。5.1 節では対比的焦点による DOM, 5.2 節では意外性による DOM に着目する。

5.1. 対比的焦点を動機とする DOM

アヤクーチョ方言の DOM では、目的語が対比的焦点にあたるか否かによって好まれる標示が異なる。以下では具体的に、対比性焦点にあたる目的語が *-ta* で標示されること (5.1.1)、一方で、項焦点にあたるが対比性を持たない目的語 (5.1.2)、対比性を持つが項焦点にあたらない目的語 (5.1.3)、項焦点にあたらず、対比性も持たない目的語 (5.1.4) は \emptyset で標示されることを示す。

具体的な議論に入る前に、本論文における情報構造に関する用語 (情報構造, 共通基盤, 焦点, 主題, 対比性) を前もって整理する。本稿では、情報構造を、ある発話内の情報要素を話し手と聞き手の共有知識内に位置づけるプロセスに関連する概念と定義する (Lambrecht 1994: 5-6)。これは、Lambrecht (1994), Krifka (2008), Arnold et al. (2013), Féry and Ishihara (2016) が提示する情報構造の定義を包括的に捉え直したものである。この話し手と聞き手がその談話に関して共有する知識の体系を、共通基盤 (common ground) と呼ぶ (Féry and Ishihara 2016; Krifka 2008)。

情報構造は、より具体的には、ある情報要素が発話の時点で既に共通基盤にあるのか無いのか、どの程度活性化されているか、既に共通基盤にある他の情報とどのように関連するかに関する概念である (Lambrecht 1994: 6)。

情報要素の共通基盤内の位置づけとして代表的なものに焦点と主題がある。本稿における焦点 (focus) とは、前提 (presupposition) と断定 (assertion) に違いをもたらすような情報要素 (Lambrecht 1994: 207–222) である。前提とは、話し手がある発話を行う際に、聞き手が既に知っていると想定している命題 (proposition) の集合であり、その発話内の語彙・文法的要素によって想起される (Lambrecht 1994: 52)。したがって前提は、共通基盤に含まれる情報のうち、個々の発話を含む語彙や文法要素によって想起される部分である。断定とは、話し手が、その発話を行うことにより、聞き手が知ったり所与のものとしたりすることを期待するような命題である (Lambrecht 1994: 52)。つまり焦点とは、ある発話を行うことで、その発話が示す命題の一部として、共通基盤に加わったり既に共通基盤に存在する情報を訂正したりする情報要素である。

焦点のうち、前提である開放命題 (open proposition) 中の欠落した項や付加詞が焦点となっているものを項焦点 (argument focus) と呼ぶ (Lambrecht 1994: 222–224)。例えば、「彼は何を食べたの?」という質問文は、「彼は X を食べた」という開放命題を提示する。この質問に対する回答「彼は魚を食べた」は断定にあたる。したがって、この回答「彼は魚を食べた」における目的語「魚」は、前提となる開放命題「彼は X を食べた」と断定「彼は魚を食べた」に違いをもたらす情報要素であるため焦点である。その上、目的語「魚」は、開放命題における空項 X に対応する項であるため、項焦点である。

なお、本稿では Lambrecht (1994) における argument focus の訳語として「項焦点」という用語を使用するが、付加詞が項焦点となり得る点に注意したい。例えば、「彼女は誰と買い物に行ったの?」という質問に対して「彼女は妹と買い物に行った」と答えた場合、付加詞である「妹」は、前提である開放命題「彼女は X と買い物に行った」と断定「彼女は妹と買い物に行った」に違いをもたらす情報要素であるため、項焦点となる。

本稿における主題 (topic) とは、それについての情報がこれから与えられるような実体を指す (Krifka 2008: 262)。例えば「彼は魚を食べた」という発話は、「彼」について、どのような行動をとったかという情報を示すものである。よって、この文における主題は「彼」である。

対比性 (contrastiveness) とは、ある発話内の指示対象が、共通基盤内の情報と対比されていることを指す。具体的には、ある指示対象が、文脈上既知のある集合の中から、少なくとも一部の他の要素にあてはまらない条件で選ばれていると解釈されるとき、その指示対象は対比性を持つ (Neeleman et al. 2009: 18)。例として「彼は魚を食べた」において「彼」が対比的な主題であるとき、「彼」は例えば彼と一緒に食事をしてきた人という集合に属する要素として解釈されている。そして、「彼」

は彼と一緒に食事をしてきた人という集合に属する他の人物には当てはまらない、「魚を食べた」という条件で選ばれている。一方「彼は魚は食べた」において「魚」が対比的焦点であるとき、魚は例えば「彼」が行ったレストランが出している食べ物という集合に属する要素として解釈されている。そして、レストランが出す食べ物という集合に属する、肉や野菜など他の要素には当てはまらない「彼が食べた」という条件で、魚が選ばれている。

本稿は、対比性を情報構造上の概念と分析する。ある指示対象が対比性を持つとき、その指示対象は、特定の条件を満たすかどうかという点で、話し手と聞き手にとって既知のある集合内の他の要素と対照されている。このように対比性は、話し手の発話で表現される情報が、どのように共通基盤上の情報と関連づけられるかに関わるという点で、焦点や主題と共通した特徴を持っている。したがって、対比性は情報構造上の概念である。

本稿における対比性は焦点や主題と両立する概念であり、かつこれらとは独立した概念である。「彼は魚を食べた」と「彼は魚は食べた」の例で見た通り、対比性を持つ指示対象は、主題としてそれについての情報が与えられたり、焦点としてそれ自身が共通基盤上に加えられたりする。ある事物が共通基盤上のある集合の中で対照されることは、その事物が前提と断定に違いをもたらす情報要素、つまり焦点であることとは独立した特徴である。同様に、ある事物が共通基盤上のある集合の中で対照されることは、それについての情報がこれから与えられる情報要素、つまり主題であることとも独立に持ち得る特徴である。このように、本稿における情報構造の定義の元では、対比性は情報構造上の概念でありつつ、焦点や主題とは異なるレベルの概念として分析できる。

以下では、これらの定義を元に、具体的な DOM の事例を分析する。

5.1.1. 対比的焦点にあたる目的語

対比的焦点にあたる目的語は、*-ta* で標示される。例えば (1) ((27) として編集・再掲) は、否定の作用域となる目的語が *-ta* で標示される例である。

- (27) 「ラウルはいくつかの物を彼女に送る予定だった。その中で手紙は送らなかった」という文脈で)

Mana Raul qillqa?-ø/-ta qu-sqa-n-rayku pay
 NEG PN[NOM] letter-ACC1/-ACC2 give-NMLZ.REAL-3SG-because 3SG[NOM]
 piña-ku-chka-n.
 be.angry-REFL-PROG-3SG

「ラウルが送らなかったのは手紙なので彼(女)は怒っている」

(27)では、前提となる「ラウルが送らなかったのはXである」という開放命題に対し、「ラウルが送らなかったのは手紙である」という断定を示している。(27)においてこの開放命題中のXに対応する項が *qillqa* 「手紙」であり、*qillqa* は項焦点であると

言える。さらに、(27) では、ラウルが送ることを期待されており、実際には送らなかった可能性のある物が手紙の他にもあることが共通基盤上既知の情報になっている。この共有知識が無ければ、「ラウルはいくつかの物を彼女に送る予定だった。その中で手紙は送らなかった」という文脈における「ラウルが彼女に送らなかったのは手紙である」という解釈は成り立たない。そして手紙は、ラウルが実際には送らなかった可能性のある物の集合から、実際に送らなかったという条件で選ばれている。つまり (27) における否定の作用域かつ目的語である *qillqa* 「手紙」は、対比的焦点にあたる。このような対比焦点にあたる場合、目的語は $-\emptyset$ ではなく $-ta$ で標示されるのが自然である。

(28) は、「選択肢が限定される質問への答え」が $-ta$ で標示される例である。

(28) (ペドロはある数冊の本の中から一冊選んで読むことになっているという文脈で)

- Q. Pedro=qa mayqin libro-ta lee-ru-n.
 PN[NOM]=TOP which book-ACC2 read-PST-3SG
 「ペドロはどの本を読んだの？」
- A. Pay Helme?- \emptyset /-ta lee-sqa-n-ta uyari-ru-ni.
 3SG[NOM] PN-ACC1/-ACC2 read-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 hear-PST-1SG
 「彼は『エルメ』を読んだと聞いたよ」

(28) では、前提となる開放命題「彼は X を読んだ」に対して、「彼は『エルメ』を読んだ」が断定として示されている。(28) においてこの開放命題中の X に対応する項が *Helme* 「『エルメ』」であり、*Helme* は項焦点であると言える。さらに、(28) では「ある本の集合のうち、どれを読んだか」という質問に対して、「その集合の中のある本を読んだ」と返答している。この文脈では、*Helme* 「『エルメ』」が、ペドロがそのうちのどれかを読むことになっていた本の集合の中から、ペドロが実際に読んだという条件で選ばれている。つまり (28) における *Helme* 「『エルメ』」は対比的焦点にあたる。このように対比性を持ち、項焦点である目的語の *libro* 「本」は $-ta$ で標示されている。

(29) の B は訂正の対象である目的語が $-ta$ による標示を受ける例である。

- (29) A: Pedro guitarra-ta=s toca-ru-n.
 PN[NOM] guitar-ACC2=FOC.HS play-PST-3SG
 「ペドロがギターを弾いたらしいよ」
- B: Mana=m, Pedro charango?- \emptyset /-ta toca-sqa-n-ta
 NEG=FOC PN[NOM] charango-ACC1/-ACC2 play-NMLZ.REAL-3SG-ACC2
 riku-ru-ni.
 see-PST-1SG

「違うよ、ペドロがチャランゴ⁵を弾くのを見たよ」

(29)では、前提となる「ペドロはXを弾いた」という開放命題に対し、「ペドロがチャランゴを弾いた」という断定を示している。(29)においては開放命題中のXに対応する項が *charango* 「チャランゴ」であるため、*charango* は項焦点であると言える。さらに、Bの言う *charango* 「チャランゴ」は、Aの言う *guitarra* 「ギター」に対する訂正として現れている。つまり、この文脈において目的語の *charango* 「チャランゴ」は、訂正されるべき、間違った情報要素である「ギター」と、正しい情報要素である「チャランゴ」からなる楽器の集合の中で、ペドロが弾いたという条件で選ばれている。このように、既に提示された情報を訂正する形で目的語が現れる場合、目的語は *-ta* で標示される。

(27) (28) (29)における、*-ta* 標示が好まれる目的語 *qillqa* 「手紙」、*“Helme”* 「『エルメ』」、*charango* 「チャランゴ」は全て対比的焦点である。これらはみな開放命題の空項Xに対応するので項焦点にあたる。さらに、(27) (28) (29)の目的語は項焦点であると同時に対比性を持つ。これらの目的語は、文脈上既知の集合から、他の要素にはあてはまらない条件で選ばれているからである。例えば(27)では、ラウルが送ることを期待されており、実際には送らなかった可能性のある物の集合が項焦点「手紙」に対する文脈上既知の集合となる。そしてこの集合の中から、ラウルが実際に送らなかったという条件で「手紙」が選ばれている。同様に(28)では、ペドロがそのうちのどれかを読むことになっている本の集合、(29)では聞き手が提示した間違った情報である「ギター」と正しい情報である「チャランゴ」の集合が文脈上既知の集合となる。このような、(27) (28) (29)の目的語のように対比的焦点にあたる目的語は、*-ta* で標示されることが好まれる。

5.1.2. 対比的でない項焦点にあたる目的語

前節では対比的かつ項焦点である目的語は *-ta* で標示されることを観察した。一方で、項焦点となっている目的語であっても、対比性を持たない場合は *-ta* ではなく *-ø* で標示される。(30)はそのような目的語の例である。

- (30) A: Ima-ta Manuel miku-nqa.
 what-acc2 PN[NOM] eat-3sg.FUT
 「マヌエルは何を食べるの？」
- B: Pay mondongo-ø/?-ta miku-na-n-ta
 3sg[NOM] mondongo-acc1/-acc2 eat-NMLZ.IRR-3sg-acc2
 uyari-ru-ni.
 hear-PST-1sg
 「彼はモンドongo (牛もつ煮) を食べると聞いたよ」

⁵ アンデス地方の民族楽器である小型の弦楽器。

(30)において、前提となる開放命題は「Xをマヌエルが食べた」であり、項焦点は「モンドngo」にあたる。

(30)は項焦点であるが、対比性を持たない。(30)では質問に対して、文脈上既知の事物と対照すること無く情報を提供している。(30)の項焦点「モンドngo」は、文脈上既知の集合から特定の条件で選ばれているわけではない。このように、目的語が項焦点であっても、対比性を持たなければ *-ta* ではなく *-ø* による標示が好まれる。

5.1.3. 対比的であるが項焦点にあたらぬ目的語

対比の性質を持っていても項焦点でない目的語は *-ta* によって標示されない。例えば、対比的主題にあたる目的語は *-ta* ではなく *-ø* による標示を好む。(31)は対比的主題が *-ta* ではなく *-ø* による標示を受ける例である。

- (31) (ジャがいもととうもろこしについて「これは誰が買ったのか」と聞かれて)
- | | | | |
|-----------------|------------------------|------------------------|---------|
| Maria | papa-ø/?-ta | ranti-sqa-n-ta, | Rosa |
| PN[NOM] | potato-ACC1/-ACC2 | buy-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 | PN[NOM] |
| sara-ø/?-ta | ranti-sqa-n-ta | uyari-ru-ni. | |
| corn-ACC1/-ACC2 | buy-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 | hear-PST-1SG | |
- 「ジャがいもはマリアが買い、とうもろこしはロサが買ったと聞いた」

(31)において、前提となる開放命題は「とうもろこしはXが買った。ジャがいもはXが買った」であり、項焦点は「マリア」「ロサ」である。そして *papa* 「ジャがいも」と *sara* 「とうもろこし」は、誰がそれを買ったのかという情報が与えられる対象、つまり主題である。さらに、「ジャがいも」と「とうもろこし」は、マリアかロサが買ったものという文脈上既知の集合を成している。よって、この文脈において、(31)の「ジャがいも」と「とうもろこし」はどちらも対比的主題であると言える。このような対比的主題は対比的焦点の例とは異なり、*-ta* ではなく *-ø* による標示が選択される。

5.1.4. 項焦点でも対比的でもない目的語

目的語が項焦点でなく対比的でもない場合、目的語は *-ø* で標示される。(32)は民話の書き起こしである Parker (1963) からの例文である。

- (32) Hinaspan=si yacha-ru-sqa-ku=ña achka llaqta-kuna-pi chay
 then=FOC.HS know-PST-NMLZ.REAL-3PL=COMPL many village-PL-LOC that
 ararankay ña warmi-ø miku-sqa-n-ta.
 lizard[NOM] COMPL woman-ACC1 eat-NMLZ.REAL-3SG-ACC2
 「そして、そのトカゲが既に彼の妻（となった何人もの女性）を食べてしまったことが、村々で知られることとなった」 (Parker 1963: 65)

(32)では、*warmi-ø*「女性」が体言化された動詞 *miku*「食べる」の目的語となっている。

(32) は、トカゲの怪物が女性たちを妻に迎えては食べてしまうという出来事が繰り返されていることが描写されている文脈で現れる文である。この文脈でトカゲが何を食べるかは既に明らかであるため、*warmi-ø*「女性」は項焦点ではない。さらに、トカゲが食べるものの集合の中で *warmi-ø*「女性」が特定の条件で選ばれているという文脈でもないため、*warmi-ø* は対比性を持たない。このように、項焦点でなく、対比性も持たない目的語は $-ø$ で標示される。

5.1.5. まとめ：対比的焦点による DOM

以上では、アヤクーチョ方言の DOM において、対比的かつ項焦点の性質を持つ目的語が $-ta$ で標示され、対比的でない項焦点にあたる目的語や対比性を持っていても項焦点でない目的語、対比的でも項焦点でもない目的語は $-ø$ で標示されることを見た。本節で提示した例文 (27) から (32) は、項焦点と対比性の有無の点から表3のように分類できる。目的語が $-ta$ で標示されるのは、表3の網掛けの部分、すなわち対比的焦点をもつ目的語である。

表3 各例文の項焦点性と対比性

	項焦点にあたる	項焦点にあたらない
対比性を持つ	(27) (28) (29)	(31)
対比性を持たない	(30)	(32)

このようにアヤクーチョ方言の DOM では対比的焦点にあたる場合は $-ta$ 、それ以外の場合は $-ø$ という情報構造による標示の選好がある。しかし、アヤクーチョ方言の DOM においては、この制約に加えて、目的語に意外性があるときに $-ta$ による標示を受ける場合も見られる。5.2 節では、そのような意外性を動機とする DOM の例を分析する。

5.2. 意外性を動機とする DOM

アヤクーチョ方言では、前項で見た対比的焦点にあたる目的語だけでなく、意外性を持つ目的語も $-ta$ による標示が好まれる。本稿における意外性とは、ある文中の要素が、文の示す意味と共通基盤を鑑みて、聞き手にとって予想しにくいと話し手に想定されること (Zimmermann 2008) を指す⁶。(33) はアヤクーチョ方言において、意外性のある目的語を $-ta$ で標示する具体例である。

⁶ 本論文における意外性の定義は、Zimmermann (2008) による *contrastive focus* の定義、すなわち “Contrastive marking on a focus constituent expresses the speaker’s assumption that the hearer will not consider the content of or the speech act containing likely to be(come) common ground.” を援用した。この Zimmermann (2008) は、西チャド諸語において従来対比的焦点 (*contrastive focus*) の標示と分析されていた形態統語的現象を分析した論文である。Zimmermann 自身はこのように定義される概念を *contrastive focus* と呼んでいるものの、この概念のラベルとしては意外性が適切であると本稿の著者は考える。

(33) (「*wug* (架空の生物) は捕まえるのが難しい動物である」という知識の下で)

Rosa *wug*[?]-ø/-ta hapi-sqa-n-ta uyari-ru-ni.
 PN[NOM] *wug*-ACC1/-ACC2 hunt-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 hear-PST-1sg
 「ロサが *wug* を捕まえたと聞いた」

(33) において話し手と聞き手は、*wug* は捕まえにくい生物であるという知識を共通基盤上に持っている。話し手はこの知識を元に、「ロサが *wug* を捕まえた」という命題において *wug* は予想外のものであると判断している。アヤクーチョ方言の DOM では、このような (33) における *wug* のように、意外性を持つ目的語が *-ta* で標示される。

意外性は情報構造に含まれる概念である。意外性を持つ指示対象は、共通基盤上の情報を元に、発話が示す命題を成り立たせにくいものと評価されている。例えば (33) の例では、*wug* が捕まえにくい動物であるという共有知識を元に、目的語 *wug* は命題「ロサが X を捕まえた」を成り立たせにくいと評価されている。このように意外性は焦点や主題、対比性と同じく、発話で示される情報の共通基盤における位置づけに関係する概念である。したがって、意外性は情報構造上の概念である。

一方で、意外性は主題、焦点、対比性とは独立の概念であることに注意したい。意外性を持つ指示対象は、それについての情報がこれから与えられる情報要素、つまり主題とは限らない。例えば (33) の発話は、意外性を持つ指示対象である *wug* に関しての情報が与えられているわけではない。したがって、意外性と主題は異なる。

意外性を持つ指示対象は、焦点とも異なる。意外性を持つ指示対象はその発話によって共通基盤に加えられたり、共通基盤上の情報を訂正したりする情報要素、つまり焦点とは限らない。例えば (33) の発話は、「ロサは何を捕まえたの?」という問いに対する答えとも、「ロサは○○ (*wug* ではない生物) を捕まえた」という断言への訂正とも解釈可能であるが、必ずこれらの解釈を持つわけではない。よって、(33) の発話において、X を項焦点とする開放命題「ロサは X を捕まえた」は前提として想起されていない。したがってこの *wug* は項焦点ではなく、意外性と焦点は異なることがわかる。

意外性は対比性とも異なる。意外性を持つ指示対象は共通基盤上にある情報を元に評価される。しかし、対比性を持つ指示対象のように、共通基盤上の情報が特定の集合を成す必要は無く、特定の条件を満たすかという点で指示対象と対照されているわけでもない。例えば (33) では、*wug* が他の特定の動物と集合を成しているとは解釈されていないし、「ロサが捕まえた」という条件を満たさない他の動物の存在を前提としていない。このように意外性を持つ指示対象が *wug* は必ずしも対比性を持たないため、意外性と対比性も異なる概念である。

重要なことに、意外性と 5.1 で述べた対比的焦点は対立的な概念ではなく両立可能である。5.1.1 で対比的焦点の例として挙げた (27) (28) (29) の目的語は意外性も持ち得る。例えば (27) では、「ラウルは、彼が送るはずだった物の中でもと

りわけその手紙が重要であると何度も言われていた」のような文脈を付け加えることで、手紙は対比的焦点であると同時に意外性を持つ。(28)では、例えば「ペドロは普段『エルメ』のような悲しい物語ではなく、コメディなどを好んで読んでいる。そして課題となっている本の中には、コメディもある」といった文脈を付け加えることで、『エルメ』は対比的焦点でありつつ意外性も持つ。そして(29)では、「ペドロは普段管楽器を演奏している」という文脈を付け加えることで、弦楽器であるチャランゴは対比的焦点と同時に意外性も持つ。このように目的語が対比的焦点にあたり、かつ意外性がある場合は存在する。その場合、(27)(28)(29)と同様に *-ta* で標示されることが好まれる。

5.3. まとめ：対比的焦点と意外性

5.1と5.2では、アヤクーチョ方言のDOMにおいて、それぞれ対比的焦点にあたる目的語と意外性を持つ目的語に *-ta* による標示が好まれることを論じた。対比的焦点とは項焦点のうち、対比性を持つものである。対比性とは、問題となっている文中の要素が文脈上既知、すなわち共通基盤上に存在するある集合に属し、かつこの集合に属する全てまたは一部の他の要素には当てはまらない条件で選ばれていると解釈されることを指す。一方、意外性とは、問題となる文中の要素が、文の示す意味と共通基盤を鑑みて、聞き手には予想しにくいと話し手に想定されていることを指す。

対比的焦点と意外性はどちらも情報構造上の概念でありつつ、5.2で示したように互いに異なる概念である。対比的焦点にあたる要素は、必ずしも意外性を持つわけではない。ある要素が項焦点にあたることと対比性を持つことのいずれも、その要素はある命題を成り立たせにくいと話し手が想定していることを含意しない。意外性を持つ要素も、必ずしも項焦点にあたり、対比性を持ったりするわけではない。ある要素が意外性を持つことは、その要素が開放命題の空項にあたることや、その要素が文脈上既知のある集合に属することを含意しない。このように、アヤクーチョ方言のDOMは、単一の要因に還元されない複数の情報構造上の要因によって引き起こされている。

6. アヤクーチョ方言のDOMの理論的意義

この節では以上の記述を元に、アヤクーチョ方言のDOMの理論的意義について議論する。6.1では他の言語においても対比性や意外性による有標な目的語標示が見られることを示し、DOM分析における対比性や意外性の重要性を論じる。6.2では、アヤクーチョ方言のDOMは、従来情報構造を文法的に標示しないと分析されてきた従属節内にも情報構造の標示が見られることを明確に示す事例であることを示す。6.3では、アヤクーチョ方言のDOMから、対比性が明確な文法的カテゴリーとして位置づけられることを論じる。

6.1. 対比性や意外性による有標な目的語標示

アヤクーチョ方言のDOMは、対比的焦点と意外性が要因になっているという点で類型論的に興味深い。対比的焦点と意外性のいずれも、DOMの要因としてはほとんど報告されていないからである。

しかし、興味深いことに、近年、ケチュア語と系統的に異なる言語において、アヤクーチョ方言と同様に対比性や意外性が特定の目的語標示と相関する事例が報告されている。例えば、トルコ語における明示的な対格標示は、目的語の特定性のみならず反類似(野田2019)のとりたてを示すことが指摘されている(林2019)。反類似とは、「ある事態に該当するのはとりたてる対象になっている要素であり、同じカテゴリーに属する他の要素は該当しないこと」(野田2019: 10)である。(34)はトルコ語の目的語の明示的な対格標示が反類似を表す例である。

- (34) Ali çay-ı sev-iyor.
 PN tea-ACC like-PRS
 「アリは(コーヒーなど他の飲み物と違い)お茶は好きだ。」(林2019: 233)

(34)のçay-ı「お茶」は特定のお茶を指しているのではなく、コーヒーのような他の飲み物に対比される指示対象としてのお茶を示している。トルコ語では無標示と有標な対格標示によるDOMが目的語の特定性によって起きることが従来主張されている(Kornfilt 2009; Böhm 2015)が、(34)の例は、トルコ語の有標な対格標示には目的語の特定性だけでなく対比性も関係していることを示している。有標な対格標識 *-ta* が対比的焦点を標示するケチュア語のDOMと平行的な現象である。

さらに、日本語でも意外性による有標な目的語標示の存在が報告されている。日本語の目的語には、アヤクーチョ方言やトルコ語と同様に *-o* と *-o* の2通りの標示パターンが見られる。Kurumada and Jaeger (2015: 170) は日本語の目的語標示について実験的調査を行い、目的語にあたる指示対象の文法機能が格標示以外の情報から推測しにくいほど、その指示対象は対格標示 *-o* で明示的に標示されやすいと主張した。具体的には、主語と目的語がそれぞれ動詞の表す事象から予想されやすい主語と目的語に対応する文よりも、そうではない文の方が、目的語が対格標識 *-o* で明示的に標示されやすいことを指摘している。この指摘も、意外性と目的語標示が結びついている点で、ケチュア語の有標な対格標識 *-ta* が意外性を標示するという本稿の分析と平行的に捉えられる。

このように、本論文の指摘するケチュア語のDOMの要因である対比性と意外性は、他の言語の目的語標示においても重要な役目を果たしている⁷。このことは、

⁷これに関連して、査読者から日本語宮城県登米町方言において有生目的語を標示するドゴが、対比性を持つ場合に限り、無生目的語も標示するという事例をご指摘いただいた(竹内・松丸2022: 83)。このような、有生性に基づくDOMにおいて対比などの情報構造的な要因によって例外的な標示が見られる現象は北部イタリア語(Iemmolo 2010: 248-249)でも見られる。いずれもDOMと情報構造の関係を考える上で興味深い現象である。

アヤクーチョ方言の DOM が、DOM 研究において対比性や意外性という新たな分析の観点を提示する重要なケーススタディとなることを示す。

6.2. 従属節内の情報構造

アヤクーチョ方言は、体言化従属節内でのみ情報構造による DOM が起きる点も特異である。2.2 で導入した通り、主文における情報構造上の概念による DOM は一般的な現象である。実際に、情報構造上の概念の1つである主題性に基づく DOM はロマンス系言語をはじめ通言語的に見られる。しかし、従属節は従来、通言語的に語用論的に平坦 (Bybee 2002: 5) であり、内部では情報構造の文法的区別が無い (Komagata 2003) と分析されてきた。例えば日本語では、(35) のように関係節中の主語を主題標示 *=wa* で標示することはできない (野田 2007: 162-171)。

- (35) a. *由紀は買った指輪
b. 由紀が買った指輪

アヤクーチョ方言においても、主題を標示するクリティック *=qa* は、(36) のように体言化従属節内に現れることができない。

- (36) *Raul qillqa-ø=*qa* qu-sqa-n-ta uyari-ru-ni.
PN[NOM] letter-ACC1=TOP give-NMLZ.REAL-3SG-ACC2 hear-PST-1sg
[「手紙についてはラウルが送ったと聞いた」を意図]

=qa と同様に、焦点を標示するクリティック *=m(i)*, *=s(i)*⁸ も体言化従属節内では用いることができない。このように、主文内と比べて従属節内では通言語的に情報構造上の概念が標示されにくいことが伝統的に論じられてきた。

しかし近年の情報構造研究においては、van Gijn et al. (2014) のように、従属節内の分析を含む複文・重文における情報構造が注目されている。Matić, van Gijn, and Van Valin (2014) は、言語や従属節の種類によっては従属節内に情報構造の標示が許されないことを認めている。一方で、デンマーク語や日本語など、ある条件下で従属節内に情報構造の標示が見られる事例が存在することも指摘している。従属節の内部で情報構造が標示され得るか、そしてどのように標示されるかは、現在まさに議論が深まりつつある重要な問題である。

本稿が分析したアヤクーチョ方言の DOM は、対比的焦点や意外性という情報構造上の概念の標示が従属節内でも確かに認められることを示している。第5節で観察した通り、アヤクーチョ方言の DOM は、従属節内においてこれらの情報構造上の概念を言語形式として標示する。このことは、近年明らかにされてきた他の

⁸ *=m(i)*, *=s(i)* はそれぞれ、母音に後続する場合 *=m*, *=s*, 子音に後続する場合 *=mi*, *=si* の異形態を取る。さらに、*=m(i)* と *=s(i)* は証拠性の点で異なっている。具体的には、*=m(i)* は直接経験の証拠性、*=s(i)* は伝聞の証拠性を表す。

言語での事例と同様に、従属節内における情報構造標示の存在を示す重要な事実である。

6.3. 文法的カテゴリーとしての対比性

アヤクーチョ方言の DOM は、情報構造における対比性という概念が、明確に言語形式として反映され得ることを示す。本稿で見たアヤクーチョ方言の DOM は、目的語の対比性の有無を、DOM における二つの対格標示の違いとして形態的に明確に区別している。

このことは、対比性が明確に定義可能な文法的カテゴリーであることを示す。Lambrecht (1994: 290–291) は対比的焦点について、対比的に感じられるかどうかは程度問題であり、対比性は文法的なカテゴリー (“category of grammar”) ではないと結論付けている。しかし、アヤクーチョ方言の DOM は、文脈上既知の集合の中からある条件で選ばれているという点で対比的な (Neeleman et al. 2009: 18) 指示対象と、そうでない指示対象を文法的に区別している。したがってアヤクーチョ方言の DOM は、Lambrecht (1994) の主張に反し、対比性が明確に定義可能な文法的カテゴリーであることを示す重要な事例である。

7. 結語

本稿では、アヤクーチョ方言の DOM の振る舞いを記述し、この現象が目的語のどのような特性に動機づけられているかを分析した。その結果、*-ta* による標示が、対比的焦点および意外性という情報構造上の概念に動機づけられていることを示した。

このようなアヤクーチョ方言の DOM は、DOM の類型論および情報構造の理論において以下の3つの示唆を与える。第一に、DOM は対比的焦点や意外性という従来指摘の無かった新しい観点から分析できる。第二に、従属節内の構成要素は情報構造上の概念を担いにくいとされてきたが、実際には従属節内でも対比的焦点や意外性といった情報構造上の概念を標示することがある。第三に、情報構造における対比性の有無は、明確に言語形式に反映されることがある。

本稿で論じたアヤクーチョ方言の DOM に関する研究は、査読者の指摘の通り⁹さらなる発展の余地を残している。具体的には、以下の3点が課題となる。1つ目の課題は、体言化従属節内でのみこのような情報構造に基づく DOM が起きる理由の解明である。節の種類による DOM の制限は、近年注目が集まっている複雑構文の情報構造の研究 (van Gijn et al. 2014) に大きく貢献しうる。本稿で議論した問題をアヤクーチョ方言における体言化の性質や歴史的発展の観点から調査・分析

⁹ 本節で示す課題の多くは、査読者の指摘に基づいている。具体的には、1) 対比的焦点と意外性を包括する説明の可能性、2) ある標示パターンが用いられる頻度に着目した DOM の分析、3) *=tag* など主節における情報構造標示と本稿で分析した DOM の対応関係の3点を、査読者から研究の発展の方向性としてご教示いただいた。

することが、今後の課題となる。

2つ目の課題は、主節における情報構造の標示と体言化従属節内の DOM による情報構造標示の相違点である。査読者から指摘があったように、ケチュア語クスコ方言をはじめとするケチュア語の諸変種は、対比を標示する接語 =*taq* を持っている。アヤクーチヨ方言も対比を表す =*taq* (Zariquiey and Córdova 2008) を持ち、この =*taq* は体言化従属節内には現れない。体言化従属節内の DOM が表現する対比的焦点が、=*taq* が表す対比とどのような相違点を見せるかが課題となる。

最後に、この DOM が対比的焦点や意外性以外の機能を持つ可能性である。この点について、どのような条件でどのような標示が現れるか、コーパスで量的・網羅的に調査することが今後の重要な課題となる。

略号一覧

1	1st person	DS	different subject	PN	proper name
3	3rd person	FOC	focus	PRS	present
ABL	ablative	FUT	future	PST	past
ACC	accusative	GEN	genitive	PROG	progressive
ACC1	accusative 1 (∅)	HS	hearsay	REAL	realis
ACC2	accusative 2 (ta)	INDF	indefinite	REFL	reflexive
AG	agentive	INF	infinitive	SG	singular
CAUS	causative	IRR	irrealis	SR	switch reference
CLIT	clitic	ITER	iterative	SS	same subject
COM	comitative	NEG	negation	TOP	topic
COMPL	completive	NMLZ	nominalization	VEN	venitive
DAT	dative	NOM	nominative		
DEF	definite	PL	plural		

参考文献

- Aissen, Judith (2003) Differential object marking: Iconicity vs. economy. *Natural Language & Linguistic Theory* 21(3): 435–483.
- Arnold, Jennifer E., Elsi Kaiser, Jason M. Kahn, and Lucy Kyoungsook Kim (2013) Information structure: linguistic, cognitive, and processing approaches. *Wiley Interdisciplinary Reviews. Cognitive Science* 4(4): 403–413.
- Böhm, Stefanie (2015) Differential object marking in Standard Turkish and Caucasian Urum. *STUF - Language Typology and Universals* 68(4): 421–438.
- Bossong, Georg (1983) Animacy and markedness in universal grammar. *Glossologia* 2(3): 7–20.
- Bybee, Joan (2002) Main clauses are innovative, subordinate clauses are conservative: consequences for the nature of constructions. In Joan Bybee and Michael Noonan (eds.), *Complex sentences in grammar and discourse: Essays in honor of Sandra A. Thompson*, 1–17. Amsterdam: John Benjamins.
- Campbell, Lyle, Nala Huiying Lee, Eve Okura, Sean Simpson and Kaori Ueki (2017) The catalogue of endangered languages (ElCat). Database available at <http://endangeredlanguages.com/userquery/download/>, accessed 2017-07-27.
- Cole, Peter and Gabriella Hermon (2011) Nominalization and case assignment in Quechua. *Lingua*

- 121(7): 1225–1251.
- Comrie, Bernard (1989) *Language universals and linguistic typology*. 2nd edn. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Dalrymple, Mary and Irina Nikolaeva (2011) *Objects and information structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Féry, Caroline and Shinichiro Ishihara (2016) Introduction. In Caroline Féry and Shinichiro Ichihara (eds.), *The Oxford handbook of information structure*, 1–18. Oxford: Oxford University Press.
- van Gijn, Rik, Jeremy Hammond, Dejan Matic, Saskia van Putten and Ana Vilacy Galucio (2014) *Information structure and reference tracking in complex sentences*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hinostroza Ayala, Aquiles (2000) *Narrativa picaresca andina*. Lima: Bendezu S.A.
- Iemmolo, Giorgio (2010) Topicality and differential object marking. Evidence from Romance and beyond. *Studies in Language* 34: 239–272.
- Kittilä, Seppo (2011) Formal and functional differences between differential object marking and differential R marking: Unity or disunity? *Open Journal of Modern Linguistics*. Scientific Research Publishing 1(1): 1–8.
- Komagata, Nobo (2003) Information structure in subordinate and subordinate-like clauses. *Journal of Logic, Language, and Information* 12(3): 301–318.
- Kornfilt, Jaklin (2009) DOM and two types of DSM in Turkish. In Helen de Hoop and Peter de Swart (eds.), *Differential subject marking*, 79–111. Dordrecht: Springer.
- Krifka, Manfred (2008) Basic notions of information structure. *Acta linguistica Hungarica* 55(3–4): 243–276.
- Kurumada, Chigusa and T. Florian Jaeger (2015) Communicative efficiency in language production: Optional case-marking in Japanese. *Journal of Memory and Language* 83: 152–178.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: Topics, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lefebvre, Claire and Pieter Muysken (1988) *Mixed categories: nominalizations in Quechua*. Dordrecht: Kluwer.
- Levin, Theodore (2019) On the nature of differential object marking: Insights from Palauan. *Natural Language and Linguistic Theory* 37(1): 167–213.
- Matic, Dejan, Rik van Gijn and Robert D. Van Valin, Jr. (2014) Information structure and reference tracking in complex sentences: An overview. In Rik van Gijn, Jeremy Hammond, Dejan Matic, Saskia van Putten and Ana Vilacy Galucio (eds.), *Information structure and reference tracking in complex sentences*, 1–41. Amsterdam: John Benjamins.
- Neeleman, Ad, Elena Titov, Hans van de Koot and Reiko Vermeulen (2009) A syntactic typology of topic, focus and contrast. In Jeroen van Craenenbroeck (ed.), *Alternatives to cartography*, 15–52. Berlin, New York: De Gruyter Mouton.
- Parker, Gary J. (1963) *Ayacucho Reader*. Ithaca, NY: Cornell University.
- Parker, Gary John (1969) *Ayacucho Quechua grammar and dictionary*. The Hague: Mouton.
- de Swart, Peter (2006) Case markedness. In Leonid Kulikov, Andrej Malchukov and Peter de Swart (eds.), *Case, valency and transitivity*, 249–267. Amsterdam: John Benjamins.
- Zariquiey, Roberto and Gavina Córdova (2008) *Qayna, kunan, paqarin. Una introducción práctica al quechua chanca*. Pontificia Universidad Católica del Perú. San Miguel: Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Zimmermann, Malte (2008) Contrastive focus and emphasis. *Acta Linguistica Hungarica* 55(3–4): 347–360.
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』東京：ひつじ書房。
- 岸本秀樹 (2016) 「日本語の属格主語と A- 移動」『神戸言語学論叢』10: 24–36。
- 竹内史郎・松丸真大 (2022) 「本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について——京都市方言と宮城県登米町方言の分析——」木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編)『日本語の格表現』65–90。東京：くろしお出版。
- 野田尚史 (2007) 「文の構造と機能からみた日本語の主題」博士論文。筑波大学。
- 野田尚史 (2019) 「とりたて表現の対照研究の方法」野田尚史 (編)『日本語と世界の言語の

とりたて表現』3–20. 東京：くろしお出版.
林徹 (2019) 「トルコ語のとりたて表現」野田尚史 (編) 『日本語と世界の言語のとりたて表現』
219–236. 東京：くろしお出版.

執筆者連絡先：
東京大学大学院人文社会系研究科
言語学研究室
e-mail: y.ukumari322@gmail.com

[受領日 2021年1月8日
最終原稿受理日 2022年5月6日]

Abstract

Differential Object Marking and Information Structure in Ayacucho Quechua

YUKO MOROKUMA

PhD Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

This paper offers a description and analysis of differential object marking (DOM) observed in *-sqa* or *-na* subordinate clauses in Ayacucho Quechua. This language allows for two patterns of object marking, accusative *-ta* and *-ø*, only within nominalized subordinate clauses. It is argued that this DOM is triggered by two information structural properties: contrastive focus and unexpectedness. The accusative *-ta* marking is preferred to *-ø* marking when an object NP is in contrastive focus and/or is unexpected from common grounds. Such DOM in Ayacucho Quechua has three implications for the typology of DOM and information structure. First, DOM can be triggered by contrastive focus or unexpectedness, although these two factors have not been widely reported to be relevant to DOM. Second, it is possible to recognize information structure-based grammatical markings in subordinate clauses, which have been said to be “pragmatically flat” (Bybee 2002). Last, contrastiveness as an information structural property can be formally marked.